

手作り—機織りのマダム

瀬田康司

パリからTGV（テー・ジェー・ヴェー：train à grand vitesse）でフランスを縦断しマルセイユへ、マルセイユからは地中海沿岸をイタリアの方に向かう。大都市を離れ、窓外に牛馬が放牧された田園風景を堪能した後は、石灰石を露出した山々や鉄分をたっぷりと含んだ赤い山々そしてその土を使って建てられた建築物を視界に納める。地中海が右手窓外に顔を覗かせる。やがて海沿いに要塞風の古城が聳え、湾内にはヨットが帆を無数に屹立させているのが目に入った。アンティープ(Antibes)駅に到着した。その前の停車駅はカンヌ(Cannes)である。アンティープは保養地、カンヌもまた高級リゾート地として世界に知れ渡っている。いずれの土地もかつて足を踏み入れたことがある。アンティープは古城がピカソ美術館となっており、カンヌは言わずと知れたカンヌ祭が開催される所だというご案内をいただいたからである。あいにくとピカソ美術館は閉館の日であり、それじゃあ街中を散策としゃれ込んでみた。またカンヌも海岸沿いに散策を試みてはみた。しかしながら、ぼくの偏屈な感性は両者ともとうてい受け入れることができるものではなかった。アンティープは口汚くののしる若者たちが、カンヌはめかし込んだ人々が、群をなす。辟易したぼくは、その後、どれほど人に勧められることがあっても、足を向ける気がわき起こってくることはない。

ところがこの日はそのアンティープ駅に降り立った。ぼくを迎えてくれた人のご指定であったからである。パリ、ギャール・ドゥ・リヨン駅を出発して5時間が経っていた。プラットフォームに降りたものの出迎えの人の姿は見えない。少し不安が走ったが、そのまま出口に向かって歩いていった。数分後に、走るようにこちらに向かってくる日本婦人の姿が目に入った。その人の名は楳原芳子さん。ぼくがフランスに渡るたびに通訳やガイドのお世話になり、かつ交友を温めている方だ。マダムに、今年の別れのおりに教わったフランス式の親愛のこもった挨拶、抱擁を繰り返した。もちろんぼくがこの挨拶ができるのはマダムだけである。従って極めてぎこちない。

アンティープからマダムの運転する車に揺られて山の方に向かって30分ほど。途中、カーニュ(Cagnes)、サン・ポール(Saint-Paul)を通り抜ける。いずれもヨーロッパ中世の集落づくりを存分に楽しむことができる光景を残している。山頂に、あたかも城の姿をした——そう、その威容を初めてみたときには、アニメ『天空の城・ラピュタ』（宮崎駿作品）を

瞬時思い出したのだが——、教会を中心として形作られた一つの大きな集落。自然水が一時も枯れることなく存分に湧き出し続けることが、集落が、歴史の重みに耐えて、存在し続ける条件となっている。この集落の周囲を取り囲む石壁はまさしく城壁であり、この「城内」に入る門が数カ所設けられていた。かつては教会の時刻を告げる鐘の音とともに、朝には開門され夕べには閉門されたという。「城内」に住む農民たちが農作業に出かけ、また帰宅を促す合図でもあり、商人たちが出入りが許される合図でもあったわけである。もちろん今は、それらの門の跡は残されているものの、閉開門ということはない。これらの集落の姿は、はるか昔、ジャン・ジャック・ルソー(Jean-Jaques ROUSSEAU)が閉門の時刻に間に合わず、そのまま放浪の旅に出、旅の先々で音楽、芸術、科学、哲学を学び、巨大な思想を形成した逸話を彷彿させてくれる。ぼくにとってとりわけサン・ポールは、一つは中世以降の貴族の砦であったことを忍ばせる石垣や砲門の跡に心ひかれるものがあり、一つは集落全体が芸術作家の工房(アトリエ)となっていることに魅せられるものがあり、あと一つは、ぼくがフランスの教育について心を傾けるきっかけとなったセレスタン・フレネ(Célestin FREINET)の教育実践の跡地であることに魅惑される地である。

今回の旅では、丸一日かけて、ゆっくりとサン・ポールを散策することを心に決めた。芸術家たちが描き残していった庶民の信仰のための小さな宗教画を、堪能するまで鑑賞したいからである。立派な宮殿跡に展示されている名画の類に心ひかれることのないぼくであっても、人々の生きる心の糧として芸術家が置きみやげに残していったものに対しては、まるでわが日本の、素朴な農村の農道に今でも残されている、素朴なお地蔵さまと共通する、土着の人たちの心を感じることができるのである。十字架が付けられた祠のような建築物に埋め込まれた、B4版ほどの大きさの板に絵は残されている。それは集落のはずれを示す石垣の外側のちょっとした空き地にひっそりと立っていたり、集落のはずれの小さなトンネルの「出口」(あるいは「入口」。おそらくそのトンネルをくぐり出ると集落の外であったのであろう)の上に飾られていたりする。原色が何であったのかさえ判然としないほどに色は褪せているものが多いが、それでもキリスト像かマリア像、あるいは聖職者を描いたものであることを忍ばせる形が残されている。この小さな宗教画の探索と鑑賞は、後日の、ヴォンス(Vence)、トゥーレット(Touretts-sur-Loup)、旧ニース(Nice vieux)の散策でも、存分に楽しむことになるのだが。

南フランスには多くの芸術家が訪れてきた。そしてその足跡を残している。それらの多くをここで語るには、まだまだ探索が足りない。今回の旅では、そのひとり、シャガール(M.

CHAGALL 1887-1985)の足跡をささやかに追いかけてみた。シャガールは、ぼくの自宅にそのリトグラフ作品が飾られているということから、親しみを持つ画家である。彼は、ぼくが南仏を訪れるときに定宿としている Hotel DIANA のあるヴォンスの教会に、タイル絵の壁画を残している。そのシャガールが、二人の妻と一緒に棺で眠っているのが、サン・ポールである。シャガール夫妻の石棺の上には小石がいくつも無造作に乗せられている。おそらくシャガールを愛する芸術家たちの、手作りの弔いの仕業であるのだろう。

ついでながら、サン・ポールからヴォンスまでは車で10分ほど離れている。しかしその二つの街の間には深い溪谷が横たわっている。その溪谷をつなぐ形であった鉄道は第二次世界大戦のおりにドイツ軍によって破壊された。そしてその跡はそのまま残されている。雄大な自然と長い歴史と、そして無惨な戦争の傷跡。二つの集落をまるで切り裂くかのように思われるのは、たんにぼくの感傷にしか過ぎないのだろうか。かのセレスタン・フレネが、その教育の独自性故にサン・ポールの公立学校から追放され、そしてヴォンスの街はずれのさらに奥の山の斜面に、小さな小さな私立学校を数人の子どもたちと始めたという史実と、どうしても重なってしまうのである。

さて、サン・ポール散策の翌日は、トゥーレットの訪問と決めた。宿からトゥーレットに行くには、バスの便があるが一日数本しか走っていない。タクシーを使えばおよそ15分の所にある。トゥーレットをはじめて訪問したのは1998年。大学院生、現職教員とぼくの4人でフレネ教育研修旅行をした際、楯原芳子さんに勧められてのことであった。

トゥーレットは職人の村である。フランスという社会・歴史を語るときに忘れてはならないのが、貴族たちの衣・住生活を彩った様々な技術である。ぼくにとってはこの上なくうれしい、頑なに、保守的なまでに、今日まで脈々と守り伝えられている微細・繊細な技術の数々。1800年代から急速に進んだ機械生産がある一方で、こうした手仕事(travail manuel:トラヴァイユ・マニユエル)の技術をフランスの文化として子どもたちに伝えていこうとする教育の動きがある。ラ・コミユヌの時には普通教育のカリキュラムの一つとして職業教育を組み込む試みをしているが、その職業教育の考え方と方法には手仕事の技術が位置づけられていた。それを裏付けるように、ラ・コミユヌの教育委員会は高級職人と呼ばれる人々を職業教育に携わる人として協力を求めている。フランス社会では職人として自立することは誇らしいこととされている。超エリートを養成するグランド・ゼコール(grandes écoles)の一つに工芸技術に関するものが設置されているのは、そうした伝統が

あってこそのことなのである。また、ラ・コミュヌに深い関心を寄せていたというセレスタン・フレネの教育実践にも *travail manuel* は重要な学習活動として引き継がれている。

今回の旅のトゥーレット訪問のとりわけの目的は機織りのマダムとの再会である。いや、はじめて訪問してもう何回目になることだろう。しかし、この数年間の訪問の間に、主も工房も、少しも雰囲気が変わることはなかった。穴蔵のような小さな空間に、糸が張られた状態で木製の機織り機が据えられている。工房の両壁面にはマダム手作りの衣料品が陳列されている。その数は決して多くはない。しかし、「手で直接触れないで下さい」という断り書きが、その多くはない量の、気高い質を証明しているがごときである。

ボンジュール、マダム。

店の奥でなにやら読み物をしていたミッシェル(Madame Michèle BADETS)に、懐かしさを込めて、声をかける。マダムには、昨年、お別れの印にと、楫原さんと二人で相談し色とデザインを決めて作ったというベストをいただいていた。「ムッシュはたばこを吸うからたばこ入れのポケットも付けておいたわよ」と言われていただいたそれは、ぼくが自宅の仕事場での寒さを防いでくれるばかりではなく、研究の励みもなって、日常愛用している。ぼくの体軀を数度の訪問の会話の折りに目視だけで測ったにしか過ぎないのだけれども、寸分の違和感もない。まさに職人技を思い知らされたプレゼントであった。今回の訪問は、そのお礼にと、日本の伝統的な職人の技がかるうじて今日伝えられている伊勢型紙（白子型紙とも言う）の実物モデルと図版を携えてきた。果たしてマダムは喜んでくれるであろうか。

ぼくの方に顔を上げたマダムには笑みが広がった。

アー、ムッシュ、ボンジュール！ コマンタレブー？

ウィ、サバ。メルシー、エ、ブ？

ウィ、ウィ。

挨拶を交わす握手に力がこもる。一年ぶりに見るマダムは少しも変わらなく、若々しさを保っていた。「また来ました。今日は日本のお土産を持ってきました。喜んでもらえますかどうか。」鞆の中から伊勢型紙の図版書を取り出し、実物モデルを取り出し、マダムに指し示した。「これは伊勢型紙と言います。伊勢というのは地域の名前で、型紙というのは日本の伝統的な着物の模様を染めるためのものです。」たどたどしい口調の説明に耳を傾けていたマダムの口から、日本風に表記すれば、「ヒャー、ワー、うれしい！ うれしいわ！ ありがとう！」と喜びを幾重にも表す言葉が飛び出ていた。そして図版のページを繰り、型

紙の一つひとつの写真を指さしては、何ごとかをつぶやいている。どうやら、織物に模様を織り込んでみようかしら、と言っているらしい。伊勢型紙は布地に乗せて上から色をなぞって模様を染め付ける染め物技法のものである。マダムはそれにヒントを得て、染めるのではなく模様を機織りしようと考えているようだ。一つひとつの型紙の模様に見入ってはトレビアン！を繰り返す。幾何的な模様もあれば花鳥風月の模様もある。マダムの手に掛かってそれらはどのような織物として再現されるのだろうか。次回の再会の楽しみとなった。

この日の朝、トゥーレットに出かける前に、ヴォンスのなじみの古本屋に立ち寄っていた。しっかりとぼくのことを覚えてくれていた店主が、ラ・コミュヌ関係の資料で、書物ではないが、1871年に発行された新聞やリトグラフが幾点があるか見てみるか、それにセレスタン・フレネのサイン入りのフレネ教育関係の資料があるか見てみるか、と声をかけてくれ、それらを並べて見せてくれた。フレネのサイン本は購入することを即断したが、ラ・コミュヌ資料については一点一点手にとって、まだ未収集の資料であることを発見し、ため息をついていた。のどから手が出るほどに欲しいものばかりだが、店の奥の書庫から取り出してくれたそれらには値段が示されていない。パリ・リュクサンブール公園裏門口近くの本屋ならどのぐらいの値段を付けるか、おおよその見当がつく。その推測をして、並べられたものすべて（30数点）を購入するとしたら、とてもじゃないが、研究補助費のついていない今回の研修の旅では持ち合わせはなく、無理にでも入手するとしたら家計に大きな影響を与えることは間違いない。ぼくのため息とためらいを見て取ったムッシュは、気分を和らげる心遣いをしてくれたのであろう、「ところで、日本のアンティークなものを幾点か入手したのだが、見てくれるか」と言って、数枚の黒い紙版を取り出してきた。何と、伊勢型紙であった。ぼくが伊勢型紙図版集で多少知識を付けていたその断片から、江戸時代に作成されたものようである。「これは何と言って、何に使うものなのか？」とムッシュに尋ねられた。後刻トゥーレットの機織りのマダムにプレゼントすることになる伊勢型紙図版集をバックから取り出し、ムッシュの前にそれを示し、「伊勢型紙と言って、日本の伝統的な着物の布地に模様を染める、そのもとのものだ。今から1,000年ほど前から伝統が引き継がれている。ムッシュが入手した型紙は今から200年から300年ほど前のもので、実際に使われたものようだ。その証拠に、もとの紙の色ではなくなっている。」と、時間をかけ、ムッシュに意味が通じるかを幾度も確かめながら、説明をした。ムッシ

ムによれば、日本文化の収集家から入手したとのこと。その収集家がどのような経緯で入手したのかまでは知らないよ、と笑みを含みながら教えてくれた。「ありがとう。これで値段をもう少し高くして売ってもいいことが分かったよ。」と付け加える。

「ところで、ラ・コミュ関係資料だが、全部で 100 ユーロだよ。」とウインクをする。ぼくがどうしても必要だと仕分けた資料の束に付けられた値段である。ぼくが頭の中で計算していた額の二十分の一ほどの値段であった。伊勢型紙に関する情報提供料を差し引いての値段であるのか、それともそれとは無関係なのか。その本当のところは分からない。しかしぼくには、ムッシュとぼくとの間で築き上げてきたここ数年間の信頼関係が、ラ・コミュ関係資料を、ぼくにとっては破格の値段で提供してくれる店主の好意であるのだろうと、思われたのである。

古書店のムッシュは、別れ際に、日本は精緻な技術を持っている、それはフランスの職人の伝統工芸の技と相通ずるものがあるように思う、と感想を述べていた。ぼくはこの感想の中に、伊勢型紙図版集を機織りのマダムにプレゼントする意義を確かめたような想いを抱き、トゥーレットに向かうタクシーに乗り込んだのであった。

・・・Madame Michèle BADETS との別れ際、「去年プレゼントしていただいたベストを毎日身につけて仕事をしています。時々あなたのことを思い出して、仕事への情熱を高めています。」と言葉をかけた。マダムは笑みを顔いっぱい浮かべて、「その言葉を励みに、私も、新しい機織りを工夫しますね。また会いましょう。」と手を差しのばしてくれた。

そうそう、今回の旅では日中の忙しさのために、毎夜の会食のお相手をしていただいただけ——それだけでもぼくにとっては至福であったのだが——となった楫原芳子さんへの手みやげは、伊賀の組み紐でつくったネックレス。三重県伊賀地方の農民が農閑期の副職としてしていた伝統工芸品である。日本の手作りの工芸品が、すっかりとフランス婦人になりきり、派手さはなくともあでやかな色気が漂う洋装のご婦人の自然な美しさを引き立てるように見えたのは、ぼくの「手作り」に対する想いの強さの現れなのであろうか。

トゥーレットをはじめ、訪問した南仏の村々の空は雲一つなく、村のはずれの溪谷の向こうの山々はミモザの花房で黄色いっばいに染まっていた。一年前の光景と寸分異なるところがない。これらの village (ヴィラージュ：村) には、ぼくが日本での生活で思い知らされているあわただしい時の流れ、そして移り変わりは、まるで無関係のようである。